



## ニュースレター Vol.15 2012. 7月号

今回のニュースレターは、6月9日に行われたリヒテルズ直子氏の講演『ホンモノから学ぶ～イェナプラン教育の教材はどうなっている?～』とワークショップの特集です。どうぞお楽しみ下さい!

※今回のリヒテルズ直子氏の記事は、6月9日の講演内容をまとめたものです。

編集(田村)

### 第14回

#### 学校にしかできないこと・学校だからできること

——正義に生き、違いの豊かさを尊重する人間を育てる——

協会代表 リヒテルズ直子

iPad第1世代の発売発表が行われたのは2010年1月。3月の販売開始からまだやっと2年余りを経過したばかりだということに、すでに、出荷台数は7000万台に及ぶといわれています。世界中で1億人の人たちがiPadを使用するのはもう目前、現に、オランダの学校では、中学生から全員iPadを持たせようという話すら出てきています。iPadに限らず、各種のタブレットコンピューター、スマートフォン、簡便なコンピューターの普及は、学校教育のあり方に、多分、学校教育史上経験がなかったと思われるほど甚大な影響を与えています。なぜなら、これまで、子どもたちの頭に可能な限り詰め込んでおかなければならなかった「知識」は、記憶しておかなくても、指先の瞬時の動きで瞬間に呼び出せるからです。しかも、その情報は、頭の中のうろ覚えの情報よりも『正確』だし、『詳細』な関連情報もすぐに呼び出せるし、その知識に関する『最新』の研究にもアクセスできます。

かつて、日本人の計算の速さ、正確さは、諸外国に比べて目立って優れていました。繰り返し九九計算を覚え、多くの子どもたちがそろばん教室に通って、暗算の力は見事なもの。店頭でのお釣りの計算など、アメリカやヨーロッパに比べると、実に早く正確でした。けれども、もう20年以上も前から、アメリカやヨーロッパの算数は、『正確さ』よりも、計算の意味、何のためにその計算をするのか、なぜ、どういう場面で数学の理論が必要なのか、を学ぶ、リアリスティックな算数・数学に変わっていました。そして実際、コンピューターの発達によって、日本の学校で育てられていた早く正確に暗算できる能力は、相対的に重要性や必要性を失っていきました。

同じことは、暗記中心の教科学習にも言えるのではないのでしょうか。繰り返し繰り返し、歴史の年号を覚えただけからといって、現在の社会問題に取り組む力となる歴史解釈は学べません。微分だの積分だの分数計算などがいくら正確にできて、そういう計算が、いったい何のために使われるのかを知らなければ、生きた生活、目の前の社会問題に取り組むことはできません。

かつて、私がまだ「イェナプラン教育」の本を出す前、ある県の教員採用試験に、オールタナティブ教育についてのテスト問題が出ていました。それは、いろいろなオールタナティブ教育の名前と、その創始者の名前を線で結べ、という問いでした。そういう問いに正確に答えられたからといって、その受験者が、オールタナティブ教育について何か勉強をしたことがあるという証拠にはならないのは一目瞭然です。でも、学力を「測る」他の手段がないから、という理由だけで、意味のないテストを繰り返していく。その結果、子どもたちや若い学生たちは、自分にとって無意味な、「知識」という名にも値しない、単なる機械的な暗記作業を来る日も来る日も続けさせられてきたのです。そして、そういう「意味のない」機械的な暗記作業がうまくできる子が、テストで良い成績を取り、高い学



Photo: 9日の講演より

歴を得ていく、、、やや誇張に過ぎるかもしれませんが、それが、画一斉教育、そして、入試中心の学力テスト教育の成れの果ての姿です。

誤解のないように言いますが、教科学習が間違っているということではないのです。さまざまな種類の文章を読む力や口頭や筆記で自分の考えを表現する力(国語)、モノを測ったり、変化を調べたり、平面や立体のものを理解する力(算数・数学)、自然界のモノの摂理(理科)、天候の変化、地形、風土、文化(地理)、様々な文化にいる人々のモノの考え方、人間存在として文化差を超えて普遍なもの、それらについて情報を集め、理解し、自分なりの解釈をして、他の人の解釈と照らし合わせる力や態度(哲学・倫理)などなど、教科学習が、子どもたちに学ばせようとしているものは深く、どんなに世の中がデジタル化されていこうとも、これからも子どもたちに学んでもらわなければならないものは、たくさん含まれています。

しかし、そういうものの大半を、デジタル化時代には、コンピューターが大いなる力を発揮して援助してくれそうな気配があることは否定できないのではないのでしょうか。現に、個別の発達に合わせて子どもたち一人ひとりに異なる教材を与えて指導してきたオランダでは、むしろ、デジタル教材を積極的に開発して、子どもたちの認知的な能力の効率的な発達のために役立てようとしています。なぜなら、国語や算数などの基礎能力は、個別にやるには、デジタル教材ほど理想的なものはないからです。子ども一人ひとりが、自分の名前でログインでき、紙に印字されただけの退屈な教科書よりも、子どもたちがわくわくと取り組めるアニメーション付のカラフルなデジタル教材は、その子がどんな能力を達成できているか、どんな点でまだ間違いを繰り返すか、などを自動的に記録していつくれますから、わかりきっていることを無駄に繰り返す必要もないし、逆にまだよくわからないまま次の課題に取り組まされることもない、しかも、飽き飽きするような先生の説明を聞いたり、できる子が黒板の前でしたり顔で説明するのを聞かされて劣等感を抱く必要もなく、自分のペースで、自尊心を傷つけられることなく学習を着実に進めていくことができるからです。

さて、でも、そんな風に、教科学習がデジタル化されてしまったら、学校の先生は何のためにそこにいるのでしょうか。教室にいる仲間の子どもたちは、なぜ、一緒に勉強しなくてはならないのでしょうか。

こう考える時、学校という場が持っている未来社会への意味を、私たちは、もう一度根底から見直して見なければならぬ、と感じるのではないのでしょうか。学校は今、子どもたちにとって何を学ばせる場になっているのでしょうか。本来、学校教育とは何を目指していなくてはならないのでしょうか。

特に、教科書と学習指導要領をもとに、うまい授業展開だけを考えてきたような教師、自らを「食堂の給仕がコックが作った料理をテーブルに運ぶ」のように「教科書に書かれていることを伝えること」だけに徹してきた先生たちにとっては、「いったいこれからどうすればいいのだ」「何を教えればいいのだ」と途方に暮れるのではないか、そういう状況が今現前に現れてきています。

教材のデジタル化をもたらした、情報技術テクノロジーの発展は、同時に、世界中の人間同士を網の目のようにつなぐことにも貢献しています。今や、言葉の壁を越えて、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアなど、地球上のどんな場所にいる人も、それと望むならば、いつでも簡単にその場で話し合いや議論に参加できます。かつては、政治家・外交官・大企業家・ジャーナリストなどにしかできなかった国際交流を、一介の市民同士でやれる時代です。

そして、それは、人間存在としての普遍的な共感を生むものであると同時に、風土によって規定されたそれぞれの人々が持つ文化の違いを、どうやって乗り越えるかという挑戦的な課題に直面する機会ともなるはずで

人類が、環境破壊と気候変化という大きな脅威の前に立たされている今、世界のどの地域に住んでいても、他地域の人々との相互理解・協力なくしては、この巨大な問題は解決できません。子どもたちが学ばなくてはならないのは、単なる「英語」、世界の「地理」「歴史」ではなく、世界が一つの大きなシステムとして、どう動いているかを理解し、自分とは全く異なる他者を、自分と全く等価の一人の人間として受け入れ、共に協力しようとする姿勢、そして行動を起こそうとする意欲、世界の現状を見つめ人類社会の未来がどうあるべきかと考える力なのです。

皆さんは、コンピューターの浸透のおかげで、デフラグという言葉をご存知だと思います。デフラグとは、デフラグメンテーションという英語の単語から来ているもので、「フラグメンテーション(分節化)をもう一度元に戻す」つまり「バラバラになってしまったものをもう一度整理して、整合性のある形に戻す」という意味です。

近代の学校、産業化時代の学校は、人々の知識を、教科に分けて、つまり、フラグメンテーション化させて子どもたちに教えてきました。それは、そうする方が、教える側にとって楽だったからです。しかし、フラグメンテーション。

化された情報は、文節と文節との間に、たくさんの溝を生みます。また、教科として教えられる時、その溝を超えるものはありません。オランダのイエナプラン教育者たちが生み出した「ワールドオリエンテーション」は、まさに、こうしてフラグメンテーション化されることによって失われた総合的な世界観を子どもたちに教えるために、学校教育の中核に据えられた考え方です。そして、ワールドオリエンテーションには、「正解」はありません。教えるものも教えられるものも、共に、リアリティに直面しながら、「考え続けること」「正解は何かと求め続けること」「学び続けること」が求められます。

イエナプラン教育の4つの活動、「対話」「仕事」「遊び」「催し」は、こういう観点からみると、何を意味しているのでしょうか。

「対話」は、自分の考えをまとめて伝え、同時に、他の人の考えに耳を傾ける場です。それは、自分一人で考えるだけでは思いつかなかった新しい見方、新しい考え方に自分の考えを照らし出す時間です。違いから学ぶ場、違いを豊かさとすることを学ぶ場です。

「仕事」は、自分の力を最大限に延ばす場[自立学習]であると同時に、協力することで、お互いに一人だけでは生み出せなかったことを協働で生み出す場(共同学習)、これも、違いを豊かさとすることを学ぶ場です。

「遊び」は、社会性の発達の間、楽しむことを共有する場、私たちは皆、他者なくしては生きられないと感じる場です。

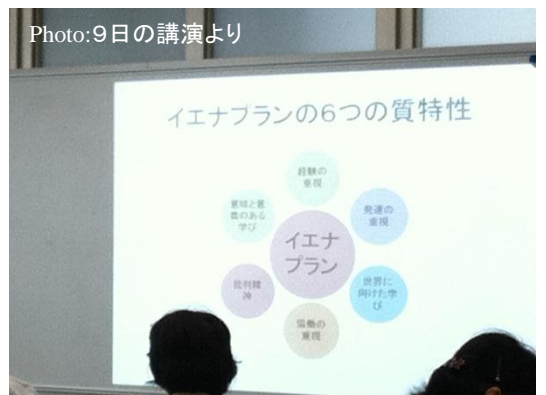
「催し」は、感情の共感の間、すなわち、私たちは、たった一人で生きる必要はない、苦しみも悲しみも、そして喜びも、共有できる人がいるからこそ生かされている、これもまた、私たちが、皆、他者なくしては生きられないと感じる場であると思います。

近代社会の黎明とともに、先進国の人々は、『市民としての自由』の一方で、「自由市場での競争」という不幸も手に入れました。家柄・権力・経済的地位などを「持っている」人々やその子弟が、スタートラインから有利になる社会を放置した結果、持てる者・持たざる者が分極化し、持てる者が、政治にも経済にもメディアにも、ありとあらゆる影響力を発揮できる社会が生まれてしまいました。教科学習に基づく学力テストで、子どもを個々バラバラにして競争させた学校教育は、そういう分極化された社会の問題を深刻化させることに貢献してきました。いつの間にか、人々は、まるで、牛馬のように、「働かされ」「考えない」存在にさせられてきました。「いじめ」はそういう、学校という場に作られた権力構造の現れですし、「不登校」は、人としての心を持って生きることを拒否された子どもたちの悲しみの現れであると思います。

オランダで今、シチズンシップ教育が早いテンポで普及しています。もっとも広く普及している教材『ピースフルスクール・プログラム』には、イエナプラン教育の理念にも通じる、民主的な市民社会についての、確固とした理念の上に成り立っている教材です。

このカリキュラムの説明の中に、シチズンシップには、3つの段階があるとまとめてあります。①個人的な道義的な行動(法や規則を守る、道徳的に行動する)、②社会参加する(ボランティア活動をする、市民運動にかかわる)、③社会的正義を守る(人類社会の福祉のために変革を求める)の3段階です。わかりやすく「食糧バンク」の例を引くと、①は、「食糧バンク」に食糧を持っていくという行動、②は「食糧バンク」の活動に自らも参加すること、③はなぜその地域に「食糧バンク」が必要なのかを考えてみることで、です。そして、さらに言えば、ほんとうに、一人一人の人間が、その地位に関わりなく、等しく幸福な生き方ができる「民主的な市民社会」を作りたければ、①と②だけではだめなのだ、ということなのです。なぜなら、1や2の行動は、独裁者や独裁的な官僚支配の国では、特に声を荒げて人々に求められる行動や態度だからです。社会を民主的にするのは、①や②もそうですが、③の社会的正義を求める声にほかなりません。

昨年の震災後、津波の被災にあった地域で起こっていること、原発を巡る議論、最近の津江市でのいじめ自殺事件、すべてに通じる大きな問題が、今、日本の学校教育の中核にあると思えてなりません。日本が直面している問題の裏に、





それに貢献してきた、問題を深刻化させている学校教育のあり方があるのではないかと、思えてならないのです。

どこから手を付ければよいのかわからない、、、そう思われるかもしれません。しかし、私たち一人ひとりが、たった一人ずつでも、自分の力を信じ、他の人を受け入れ、人類社会の未来のために他者と協力しながら貢献しようと思う子を育てることができたなら、、、それは、必ず、未来の力となるはずで。孤独な心で、あなたの声、あなたの支えを待っている子どもや若者が、いっぱいいます。できる子、よく発言する子ではなく、目立たないところに。

そして、どうしたらいいかわからなかったら、どうか、イェナプラン教育のことを思い出してください。必ず、ヒントが見つかるはずで。



後半のワークショップでは、ストーリーラインアプローチとディベートを行いました。オランダの授業の一環が垣間見え、また、その意図するところの深さに感銘を受けました。それでは、ワークショップのご報告もお楽しみ下さい。

## ストーリーラインアプローチとディベートから学ぶこと

報告: イェナプラン教育協会事務局 田村

6月のワークショップ準備に向けて、リヒテルズさんから協会メンバーに「今回のワークショップで必要なもの」の連絡がありました。はさみ・のり・包装紙・段ボール・端切れ・色鉛筆・色ペン・折り紙…etc. 準備品を聞いただけで、「何を作るのかしら？」とワクワクした気持ちになり、そして迎えたWS当日…。私たちは『ストーリーラインアプローチ』という素敵な学びと出会うことになりました。

「今朝、早く起きた順番に並んで下さい。」

というリヒテルズさんの言葉で、36名が一斉に動き出しました。

「6時に起きました～」

「あ、私の方が早いですね。」

参加者がそれぞれコミュニケーションをとりつつ、1列に並べたところで、リヒテルズさんが1～5の番号を振ってグループ編成が完了し、各々自分の番号のテーブルに集まってきました。お互い初対面という方がほとんどです。そして、ストーリーラインアプローチが始まりました。



Photo: 9日のWSより

『ある少年がいます。』

- ・少年の名はフローリスです。
- ・フローリスはある島の町に住んでいます。
- ・フローリス君は鳥が好きで、ちょっと恥ずかしがり屋です。

画面に次々と映し出される『フローリス君の背景』を、皆ゆっくりイメージし始めた様子。さらに、リヒテルズさんの説明は続きました。

- ・皆さんはフローリス君がどんな外見の子だと思いますか？
- ・フローリス君には2人の仲良しの友達があります。皆さんはこの友達がどんな外見だと思いますか？
- ・フローリス君は1件の家に住んでいます。皆さんはフローリス君の家がどんな家だと思いますか？
- ・その家の中でフローリス君の部屋はどんな部屋だと思いますか？

・もちろんフローリス君は1人で暮らしているわけではありません。フローリス君は誰と一緒に暮らしていると思いますか？

少しずつ出てくる情報と問いかけに、島で穏やかに暮らしているであろう恥ずかしがり屋な少年のイメージが広がっていきました。ここで私たちに課題が出されました。いよいよ、事前準備で知らされていた道具達の登場です。

『5つのグループそれぞれで、次のものを表現してみましょう』

- 1: フローリス君
- 2: フローリス君の友達
- 3: フローリス君の家
- 4: フローリス君の部屋
- 5: フローリス君の家族

1グループは課題の1を、2グループは課題の2を…、というように、それぞれのグループが1つずつ課題に取り組み始めました。自然と話し合いも盛り上がっていった様子。

「髪の毛の色は何色かな？」

「金髪？」

「鳥が好きなんだから、鳥がすぐに見られるような家がいいよ。」

「出窓作る？」

話し合いながら、制作のために用意されていた材料もチェック。はさみやのりを手にして、すぐに作成に入ったグループ、話し合いをじっくり行っていたグループ。それぞれのカラーが出ていて面白かったです。

この時の参加者は皆、生き生きとしていました。フローリス君について考え表現していく事を通じて、グループメンバーのコミュニケーションが活発化しました。他グループのストーリーを共有して課題を制作しようという動きも見られました。そして何より、段ボールを切ったり、端切れを張り付けたりしている大人達の姿は、子どもの頃に返ったようで楽しそうでした。そのような雰囲気の中、作成時間のタイムリミットを迎え、各グループで考えた事、表現した事の発表と共有を行いました。

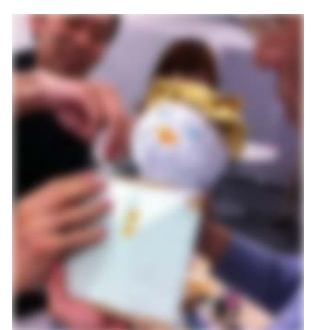
「フローリス君は島に住んでいて、鳥が好きっていう事で、僕はもう少しどんな性格かなって話し合いました。鳥の方から寄ってきてしまうような、物静かで内向的な感じです。欧米という事で栗色の髪、青い目、高い鼻…。そして、笑い方はちょっと控え目。大笑いはしない感じです。外に出て自然観察のしやすい格好にしました。あと、お父さんは医者か先生なんじゃないかって話も出ました。」

ところどころ笑いが起きつつ、フローリス君を作成した班の発表が終わりました。

発表を聞いて、どんどんフローリス君のイメージが膨らんでいきました。鳥と仲良しで、控えめな微笑を浮かべる少年の姿が思い浮かべられます。

「フローリス君のお友達はやはり物静かです。1人目はおじいさんで、漁師。自然にすごく詳しくて、フローリス君と何も話さないけれども時間を共有できる、そんな友達です。もう1人は同年代の女の子です。名前は…、えーとフローラスちゃん。フローラスちゃんはとっても活発で、星や山が大好きで詳しいです。ミミズを養殖していたりもします。餌の提供って部分でフローリス君ともつながっています。家が近所で、二人はよく遊んでいます。」

フローリス君のお友達もここで登場。



そして、彼の家はとっても素敵なものでした。

「フローリス君の島はバリをイメージして作りました。海辺に建つ家です。1人部屋は確保しようと話し合いの中で決めました。フローリス君の家には窓があって、鳥がとまれるようになっていました。鳥箱などもあって小さな鳥も保護しています。毎日鳥を眺めながら過ごしていて、勉強する机、ハンモックがあって1人でゆったり過ごせます。居間は家族で団欒の時間が過ごせるようになっています。」

フローリス君が快適に過ごせるよう、さまざまな工夫があり、グループメンバーのフローリス君への愛情を感じました。

「隣の班の家がバリをイメージした感じという事で、我々もそれに合わせました。フローリス君の部屋ですが、彼は鳥が好きという事でとにかく空想家でもあるんですね。思いは世界に羽ばたくように、壁紙は世界地図にしました。中にはハンモックがあり、休めるようになっています。フローリス君は鳥が好きなので鳥かごなどは一切持っていない。鳥が自由に入出入りできるような止まり木などもあります。あとですね、彼は内向的で読書が好きという事で、こちらには本棚もあります。鳥の辞典やシェイクスピアの本もたくさんあります。」

家を作る班と部屋を作る班では、どうやらお互いの設定の共有をしたようです。そのため、家や部屋という周りの環境から、フローリス君をよりイメージしやすくなりました。

「おばあちゃんと、お父さん、お母さん。これがフローリス君の家族です。彼はとても他の家族から愛されていて、愛情たっぷり育てられています。それ故にちょっと周囲に中々…溶け込めないというか。彼は鳥をペットとして飼ったりはしません。あくまで、野生の鳥と触れ合っています。」

最初に出てきたほんのわずかな情報から、こうして彼の家族が出来上がり、性格形成の背景にまで迫っていった…。そして、参加した人々はフローリス君に対して愛着・愛情を感じられるまでになっていた。そんな中で、リヒテルズさんからストーリーラインアプローチの真意、オランダではどのように展開されていっているかという説明がありました。



今回、参加者が実感した通り、ストーリーラインアプローチには「一度作ってみると感情移入できる。」というしかけがあります。オランダでは、クラスで友達を中々作れず、いじめられたり、引っこみ思案だったり、寂しがっている子を念頭にこのプログラムを展開する事があるそうです。

例えば、「フローリス君が都会に引っ越さなければならない」という設定を加え、この時の

- ・フローリス君の気持ち
- ・フローリス君の友達の気持ち

を考え、どうしたらフローリス君が新しい環境・学校でうまくやっていけるか、彼の友人としてアドバイスを考えたりするそうです。それを『フローリス君への手紙』『新しい学校の先生への手紙』(フローリス君が早く環境になじめるように。)として表現します。すると、それらの手紙を作成する事から

- ・クラスで孤立化している子が友達作りのコツをつかむかもしれない。考えるかもしれない。
- ・教員も子ども達が教師に何を求めているか分かる

という事が分かってくる…。このプログラムには深い深い意味と可能性が秘められています。さらに、他の分野へのアプローチも可能です。

『フローリス君が持っている鳥の本』から、本に取り上げられている鳥を考え、鳥のリストを作成。そして身近な鳥をまとめるファイルを皆で作っていく事もあるそうです。そして、教師はここから『渡り鳥』の授業を組み立てていったりします。

- ・あなたは～だと思う？
- ・皆はどう思う？

という問いかけを常にし、『自分だったら？』という主体性を持つことによって子ども達の学びがさらに広がっていくという、素敵なしかけがここにはありました。

大切なのは、一つの学びがまた新たな学びの扉を開いてくれること。そんな事を実感したワークショップでした。

最後に、後半はがらりと雰囲気を変え、ディベートを行いました。テーマは『小学校高学年における学力テストは必要か？』。

賛成チーム・反対チーム(個人の意見は関係なく)、ディベート判定チームに分かれ、まずはグループごとに『なぜ賛成なのか？』『なぜ反対なのか？』論理の組み立てを始めました。判定チームはどのような基準で、それぞれの意見を採点するのか？について話し合いました。傍から見てみると、このチームが一番悩んでいたように見え、改めて『評価をする』という事の難しさを感じました。

ポジティブな批判について、議論をし続けるという事について考えさせられた時間でした。民主的なシチズンシップを実現するには？システムを変えて先へ進んでいくには？大きな問題提起がなされ、あっという間の4時間が終わりました。

最後に、6月9日の講演とワークショップに参加して下さった方々の感想を掲載させていただきます。

## 講演・ワークショップの感想 ～参加者からの声～

### 1: 講演・ワークショップで印象に残った内容や感想について

- ・社会的正義。皆が安心して自分の意見を言えるような社会にという話が印象に残った。
- ・【社会的正義】を養うことがもしかしたら今後の学校の役割なのかなと思います。違うことも受け入れる、それが豊かさという考え方が大人にも子供にも大切だと思いました。
- ・獣医の話(ストーリーラインアプローチの展開)。いきなり本物を示して良いと思っていた。それではいきなり現状(システム内)にぶつかりそれが正しい。それが全てと思ってしまうこと。
- ・今の日本に必要なことが凝縮されていると思った。
- ・ワールドオリエンテーションやサークルのやり方を実際に感じる事ができた。
- ・『違いがあることが豊かさ』という言葉が印象に残りました。
- ・『違うことが豊かさを生む』『学ぶことを学ぶための環境をどう作るか』ワークショップ、協働作業もですが、ディベートは自分の気持ちが出やすいくせを実感できました。
- ・社会的正義の大切さなど講演を聞いていろんな事が頭をめぐっています。ワークショップでの実践、取り入れていきたいです。
- ・ストーリーラインアプローチが面白かったです。フローリスの状況をみんなで検索したのが楽しかったです。
- ・今日はありがとうございました。何度も出てきた『他者』というキーワードが印象深く、大変勉強になりました。
- ・最初は一体何をやるのだらうと思いましたが、面白い興味を持てる内容に考えが変わりました。
- ・『私たちは他者を必要としている。』という言葉が印象に残りました。
- ・教育上の問題の全てが民主主義的なcitizenshipという言葉に集約されている気がしました。
- ・最後のディベートは子どもだけでなく大人も改めて学ぶべきことだと思いました。
- ・表現方法が字でなくても良いというのがとても参考になりました。全てすごかったです。1つでもやっていきたいです。



- ・教育は閉じていないということ。今、本当に面白い社会が始まろうとしています。その中で教育(特にこのような開かれた教育)が果たす役割はともて大きなものだと感じています。
- ・民主主義の大切な要素から、今生きにくい社会への向かい方に勇気を頂きました。
- ・『社会的正義』とシステムの関係が難しい内容だと思いました。中国などの自由に発言できない国が世界にまだあるので、どうしたら良いのか。原発を再稼働する発想も出てきてしまう。次の事故では日本は住めなくなってしまうのに…システムが変わらない。
- ・『学校は将来理想の社会を想像する所、守られる所、大人はそこに関わることで今の社会を変えていく関わりを持つ』という話は学校を大切に理由がよりクリアになった。

## 2: 講演・ワークショップを受けて今後取り組んでみたい(挑戦してみたい)活動

- ・ディベートすることを自然にクラスに取り入れていくべきだと感じました。授業の場で違う意見を言うことは相手そのものを批判しているのではなく、その考え方に対する意見なのだから、自由に発言して良いという事を知ってもらいたいです。外部から入る人ではなくても、やはり生徒一人一人がfacilitatorになってクラスの子どものサポートができる状態が理想なのかなと思います。幸せになる子ども達の未来のために！！ですね。
- ・社会や道徳の学習はストーリーラインアプローチにのせられるかも？ディベートもやりたいです。
- ・ストーリーラインアプローチとサークル対話
- ・今、自分の地元で活動を始める準備をしています。今日学んだことを実践してみたいです。
- ・ストーリーラインアプローチには挑戦できるかなと思っています。
- ・ディベートをクラスへ！！ストーリーラインアプローチを使って教科を横断的にしていきたいです。
- ・ストーリーラインアプローチは子ども達にも感情移入しやすく楽しかったので、子ども達の実態に合った教材作りに取り組んでみたいです。
- ・言葉だけの説明より、グループ又は個人でも何かやることでより理解できるので、小学校でも何らかの形でゲストティーチャーを理科の授業などで招いて実践していきたい。
- ・教育サポートセンターの日本バージョンを作りたい。(広い意味で)
- ・私が今行っている事を振り返りたいです。
- ・計画を進めている学童施設にイェナプランを取り入れて実現します。
- ・学校教育の中にこのようなエッセンスを取り入れる機会を増やすような取組をやりたい。
- ・自分の村の教育を変えていきたい。少しずつイェナの大切な点をふきこんでいきたい。
- ・サークル対話が高校でできるようにしたいです。
- ・ストーリーラインアプローチの枠で表現したり、何らかのミーティングを企画したいです。



### 【リヒテルズ直子さんへのご質問・みなさんの実践談】を募集します。

オランダの教育・社会について、リヒテルズさんに聞いてみたいことはありませんか？

また、サークル対話などを実践されている方々の、『こんな場でやってみたら良かった』『こんなところが難しい、わからない。オランダではどうしてるの？』など、実践報告や感想、素朴な疑問などを教えていただけませんか？

みなさまの実践は、ニュースレターで編集し、ご紹介していきたいと思っております。この機会に、日本での実践に関する情報や知識を共有し、会員のみなさまとのネットワークを広げていききっかけになれば嬉しいです。

実践談やご質問をお送り頂く際は、件名に「質問箱」「サークル対話実践談」とお書きの上

[info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org) までお送り下さい。

※紙面の都合上、頂いたご報告やご質問をこちらで編集することがあることをご了承下さい。皆さまからの お便りをお待ちしております。





## 実践報告

### 『ストーリーラインアプローチ、やってみました。～世界史バージョン～』

高校講師 田村 悠子

「これ、世界史の授業でもやってみたい！」ストーリーラインアプローチと出会った瞬間に私が感じた事です。

私は高校で世界史の授業を担当しています。この時、古代ローマ帝国の単元に入ったばかりでした。古代の単元は意外と生徒に人気があります。物語感覚で歴史を捉えているようです。一方で、あまりに遠い時代・遠い地域で起こった事象を身近に感じられず、ただの暗記として処理してしまう子達も少なくはありません。(これは私の力不足のためですが…。)

私が自分の授業の目標としているのは『歴史を考察する力をつける事』『多様な世界・価値観に触れ、新しい未来を作っていく力を養う事』です。

しかし、数年前から、従来の画一的な授業では、自分の目標からどんどんかけ離れていっている様な気がし、限界を感じていました。

「生徒が主体的に考え、授業に取り組める機会や環境を作りたい」と思い、サークル対話やプロジェクト型の授業を取り入れたりしてみました。どうしても、どうしても上手くいかない事が多く試行錯誤を繰り返しているクラスが毎年あります。今回の世界史バージョン、ストーリーラインアプローチも、そのクラスに向けてやってみたい！少しでも身近に歴史を感じてほしい！そんな思いでチャレンジしたのです。人物に感情移入ができ、尚且つ過去を身近に感じる事ができるであろうストーリーラインアプローチに強く魅かれたのはこのためでした。

当初はヒテルズさんに、「カエサルのところでのストーリーラインアプローチをやります！」と宣言し、カエサルをより生き生きと授業で蘇らせる気満々だった私ですが、いざ生徒の状況を考慮しつつ授業を組み立て始めると、様々な迷いが生じてきました。いつもだったら、お風呂に入っている時にどンドン降りてくる授業案も、今回はちっともやってきてくれません。「全然降りてこない～」家族に弱音を吐きつつ、マインドマップを作っては「う～ん。これじゃイマイチ…」とやり直して…。という事を繰り返しました。そして、授業を予定している日が迫り、切羽詰まった段階で、カエサルから少し離れてみることにしたのです。

まずは、目標の整理から。

- ・古代ローマ帝国の人物・歴史を身近に感じる
- ・古代ローマ帝国の風習などを学ぶ

ここから再度スタートです。そして、主人公を皇帝でも何でもなく、高校生と同年代のごく一般の人物に設定し、感情移入しやすいようにしました。そして、舞台はポンペイに。



## 【設定・課題】

ポンペイの遺跡からたくさんの遺体が発見された。ある遺体の人物は15歳～20歳の女性と推察される。

何か大事そうなものを抱えていたらしい事が分かっている。

火山の噴火から1900年以上たった今、改めて【彼女】の生きていた頃のストーリーを考えて、忘れ去られていた人生を蘇らせよう。

家族は？ 友達は何が好きだったのか？ 何を抱えて避難していたのか？ 奴隷だった？ 市民だった？

当時の資料(風習・建築など)を配布した上で、それぞれの班で『ストーリー』を考えるという課題。

ストーリーラインアプローチに使える時間は、授業進度の都合で1時間(50分)。この間にグループ分けをし、ポンペイの解説と動画を見た後で、当時の人々の風習などを学んだ後、主人公のストーリーを考え、作成をするという流れにしてみました。ちょっとキツキツのスケジュールですが、「とにかく、やってみよう！」と強行しちゃいました。

ここからは結果の報告です。

まず、私がストーリーラインアプローチを一番やってみたかったクラスでは…。半分玉砕！でした。

学力別にクラスが編成されていて、いわゆる一番下と言われているこのクラス。どこか無気力だったり、いじけた感じが時々見られるのですが、普段からサークル対話や講義式の授業でも上手いかない事があり、私にとっては課題が多いのです。

この日はクラスメンバーの三分の一くらいが寝ているところを、「まあ、まあ、やってみよ？」と起こしながらスタート。動画と説明のところまでは喰い付きが良く、ポンペイの遺跡や遺体に衝撃を受けた様子で質問もたくさんありました。いよいよ、ストーリー作成の段階に入ると、ふざけてしまった班が3班。真面目にやった班が3班と、ちょうど半分に分かれた感じです。

授業が終わって、自己反省会を頭の中で開いていた私のところに、普段授業にあまり参加する事がなかった子が1人やってきました。そして、「今日の授業楽しかった。考えるのも楽しかった。」と言ってくれたではありませんか！ 嬉しくて嬉しくて、もっともっと工夫して彼女達の学びを刺激していきたい！と気合を入れ直しました。

また、別のクラスでも同じ事をやってみました。こちらのクラスはグループ分けで少々もたついた以外は非常に順調に授業が流れていき、

「奴隷と市民って服装違うのかな？ ちょっと資料かして！」

「名前は？ 女の子の名前の付け方、ローマ人ってひどくない！」

「この年齢だと結婚してる事もあるんだね。」

「バーが残ってるんだから、そこのママとかやってたって設定にしちゃう？」

などと、盛り上がりを見せており、【彼女】のストーリー作成と制作にも熱が入り、短い時間の中で色々なやり取りをしていました。



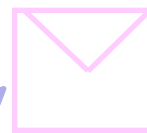
面白かったのが、普段の授業ではめったに見られない生徒の姿が垣間見られた事です。話し合いもそこそこに材料をざっくりと切り始める大ざっぱな子、リーダーシップを発揮している子、人の話を聞くのが上手な子、講義式の授業では生き生きとしているけれど、逆にグループの中ではなんとなく手持ちぶたさにしている子、絵が上手な子、色々な姿がそこにはありました。

強行スケジュールの中でのストーリーラインアプローチでしたが、多くの子が楽しんでくれて、私も得るものが多く、生徒達からたくさんの事を気づかされました。歴史×ストーリーラインアプローチ、とても面白かったです。また形を変えて、2学期もチャレンジしてみたいと考えています。





Q1. ワールドオリエンテーションでは具体的にはどのようなテーマでやっているのですか。子どもたちに合ったものを自分で判断し選べばよいのでしょうか。



### A:リヒテルズ直子より

オランダのイエナプラン教育の関係者たちも、ある時期にワールドオリエンテーションのテーマを整理する必要に迫られました。基本的に、子どもたちの経験、できるだけ、子どもたちの身の回りに、ある現象を生で発見できることを「きっかけ」に、それを、世界にまで広げていくようなテーマを求めています。

日本の学校で「総合学習」と言われるときに、安易に理科と社会科を接合させたものだ、と受け止めることが多いようですが、基本的に、イエナプランのワールドオリエンテーションは、理科・社会を超えて、ありとあらゆる教科領域につながるものと考えられています(その逆ではありません!!!)。ですから、まず、教科ごとの内容を見て、それを総合学習へと組み立てていくのではなく、経験領域を出発点として、そこから、教科学習が持つ意味を子どもたちに経験的に理解させる、という考え方です。

経験領域は、(拙著「オランダの個別教育はなぜ成功したのか」にも書いていますが)、①作ることと使うこと(労働、消費、持続可能性など)、②環境と地形(人の生息、動植物の生息、住まいとしての地球・宇宙環境)、③めぐる一年(一年の中の月日、季節、お祝いや催し、学校の一念など)、④技術(建設、機会と道具、大きなシステム、原料とエネルギー、技術の使い方など)、⑤コミュニケーション(他の人と、自然と、あるいは、自然の中で、他国の人と、など)⑥共に生きる(社会に帰属する、共に生きる、共に一つの世界を、など)、⑦私の人生(私、人々、大人たち、など)という7分野に分けられていますが、そのほかに、時間と空間という二つの軸を常に組み合わせます。

テーマとして何を取り上げるかは、つまり、常に、この7つの領域を順にめぐっていくように企画しています。通常、小学校は、8学年で、1年間に、約1か月ずつの時間をかけて8~10テーマほどを前項統一のテーマとして取り上げ、各学年ごとに相応しい課題で取り組んでいきます。例えば、「春」というテーマを前項テーマにした場合、低学年では草花、鳥、中学年では日光の観察、高学年では気候の変化といった取り上げ方ができるはず。子どもは8学年の間に、少なくとも60回、異なる具体的なテーマでワールドオリエンテーションに取り組むわけ。学校によっては、日本の夏休みの研究テーマのような感じで、年に1, 2回、個人研究テーマをさせるところもあります。

7つの経験領域で何をするか、時間・空間とどう組み合わせるか、は、最初は試行錯誤で大変かもしれませんが、経験を積むことで、テーマがたまってきます。オランダのイエナプラン教育の関係者たちも、いろいろな学校の先生たちが取り組んだテーマを集めて、7つのテーマに沿って整理していきました。

~続く~

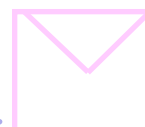


～続き～

できれば、日本でも、例えば、この日本イエナプラン教育協会に参加していらっしゃる先生たちの間で、ワールドオリエンテーションのテーマとそこでのアクティビティのアイデアを協働で集めて整理していく、というようなネットワークを作っていくと良い、と思います。



Q2. 先生同士のネットワークや先生への教育や勉強のやり方などが知りたいです。

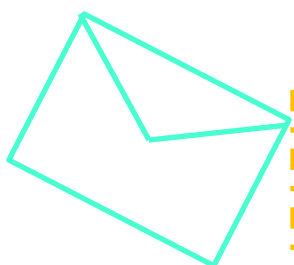


A:リヒテルズ直子より

オランダのイエナプラン教育協会には、200校余りの学校の先生たちが参加しています。ベテランの先生、退職した先生などが率先して指導者となり、教材研究のグループや、情報交換の場を作ってきました。この件についても拙著「オランダの個別教育はなぜ成功したのか」について触れていますので、参考にしてください。

また、オランダ・イエナプラン教育協会は、年に1度、3日間の合宿研修をやって折、500人余りの参加者が、新しい教育理論についての講義を受けたり、ワークショップに参加して情報を更新しています。協会は、その他に、新米教師のための研修会も毎年開いています。残念ながら、日本のイエナプラン教育協会はまだそこまで発展していません。私の帰国の折に、講義やワークショップをやっていますが、長期的には、協会参加者が、自分たちで意見交換をし、方法を構築していく場にしていてもらいたいなあ、と思っています。なぜなら、協会代表の私が、一方的に「伝達」し、会員がその情報を「受け止めるだけ」という形が長期化し、定着するのは、イエナプラン教育本来の理念に反するものだからです。

会員はじめ、多くの方たちに、オランダでのイエナプラン教育研修や学校訪問をしてもらう機会を提供しているのも、一人でも多くの、日本で現場を持って仕事をしてられる教育者の方たちに、主体的に日本イエナプラン教育を担って行っていただきたいとの願いからです。この点での今後の発展を心から祈っています。



オランダの教育、イエナプラン教育に関するご質問を募集しております。

下記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください！

[info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)



**★ニュースレターへのご意見ご感想をお待ちしております。**

より良いニュースレターの制作のためにも、みなさまのご意見ご感想をお聞かせください。

[info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)

心よりお待ちしております。

**★協会のFacebookページができました。**

Facebookをご愛用、ご活用の皆さま、協会のページができました。

イエナプランに関心を持っている方や多様な教育に興味がある方が、お互いの活動や意見を共有できればと思います。お気軽にご投稿下さい。

**★ニュースレターへ皆さんのイエナの活動や実践をお寄せ下さい！**

イエナプラン教育に興味・関心を持たれている方々とのネットワークづくりをしていきたいと思っています。皆さまの活動(体験談・実践してみた上での悩みや失敗談など何でも)をニュースレターでご紹介させて頂き、イエナの活動の輪を広げていきたいと思っています。どんな小さな事でも良いので、[info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)までお寄せ下さい。心よりお待ちしております。



**★各支部のご案内**

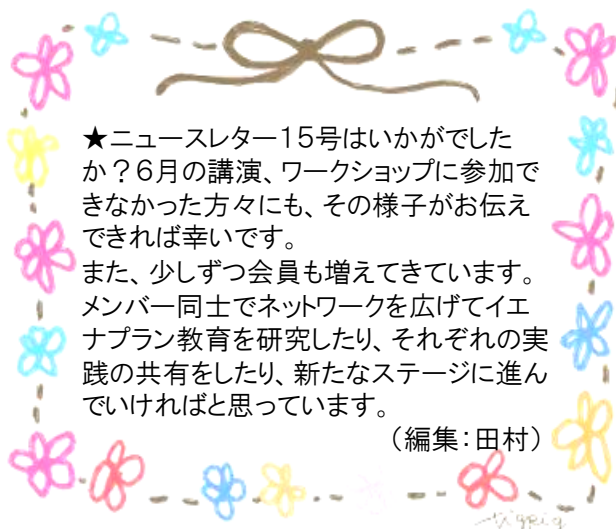
東京支部 [info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)

千葉支部 [chiba@japanjenaplan.org](mailto:chiba@japanjenaplan.org)

埼玉支部 [saitama@japanjenaplan.org](mailto:saitama@japanjenaplan.org)

京都支部 [kyoto@japanjenaplan.org](mailto:kyoto@japanjenaplan.org)

福岡支部 [fukuoka@japanjenaplan.org](mailto:fukuoka@japanjenaplan.org)



★ニュースレター15号はいかがでしたか？6月の講演、ワークショップに参加できなかった方々にも、その様子がお伝えできれば幸いです。

また、少しずつ会員も増えてきています。メンバー同士でネットワークを広げてイエナプラン教育を研究したり、それぞれの実践の共有をしたり、新たなステージに進んでいければと思っています。

(編集：田村)